

冷戦時代のプロパガンダの内情

～旧東ドイツ・RBIの調査から～

メディア研究部 塩崎隆敏

ウクライナへの軍事侵攻、イスラエルとパレスチナの衝突で、改めて偽情報やプロパガンダに注目が集まる。現状を分析するうえで、歴史を振り返ることは欠かせない。冷戦時代、東西両陣営はどのように自陣に有利な情報を流していたのか。ベルリンの壁によって分断されていた旧東ドイツ（ドイツ民主共和国）でも、西側を含めた世界に向けてプロパガンダが行われていた。

冷戦終結から30年以上を経て、当時を知る関係者は少なくなりつつある。

今回の調査では、東ドイツの国際放送を担っていた「RBI（ラジオ・ベルリン・インターナショナル）」に在籍していた実務の担当者6人から当時の内情を聞き取った。

聞き取りからは、▶RBIの基本方針は、ドイツ社会主義統一党の中央委員会の政治局が決定していたこと、▶4週間に1度のペースで、党の国際問題担当の責任者と打ち合わせをしていたこと、▶中央編集部が国の外交政策に関する特定のテーマについて文書を作成し、各外国語の翻訳の基礎にしていたこと、などが判明した。

各担当者は、プロパガンダへの考え方、自身の関与についての認識がそれぞれ異なっていた。放送を出していたのは、東ドイツが各国からの外交的承認を得るのが目的だったと、全員が証言した。プロパガンダを行っていたと認める担当者がある一方で、「不都合な面を伝えなかっただけで、うそはついていないし、現在にみられるような偽情報を流していない」などと証言する担当者もいて、当時の内情の一端が明らかになった。

1. はじめに

2022年10月、イギリスの公共放送BBCは、ラジオ放送の開始から100年を迎え、さまざまな記念事業が展開された¹⁾。2025年3月にはNHKもラジオ放送開始から100年を迎える。テレビ放送は日本では1953年に開始された。ラジオ・テレビともに、放送は多くの情報を人々に届け、コミュニケーションの手段として活用されてきた。

一方で、放送は旧日本軍の大本営発表のように、戦果の水増しや不都合な事実の隠蔽といった、事実と異なる情報を広めたり、敵国に向けた謀略目的の情報を流布したりした歴史を持つ。内外に向けて、さまざまなプロパガンダが放送によってももたらされてきた。そしてそ

れは、21世紀に入った現在も、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻や、イスラエルとパレスチナによる衝突で、事実とは異なる情報が放送やインターネット上で日々、流通している。

20世紀においては、冷戦時代に東西両陣営が自陣に有利な情報を発信していた。インターネットがなかった当時、その主要な担い手は、短波放送などによるラジオの国際放送だった。旧ソビエト社会主義共和国連邦のモスクワ放送、アメリカのVOA (Voice of America) が東西を代表する放送局である。

東西冷戦のさなか、東側ではどのようなプロパガンダ放送を行っていたのか。その実態をまず知ることが、誤情報・偽情報がまん延する現代にとって不可欠なのではないかと考えるようになった。



旧東ドイツ側にあるベルリンの壁より

この調査はもともと、冷戦終結から30年となった2019年の時点で構想し、2020年度に当時のモスクワ放送の関係者を対象に行うことを計画していた。しかし、新型コロナウイルスによる感染が世界中に拡大し、延期となった。新型コロナの感染状況が落ち着く兆しをみせ始めたものの、2022年2月にはロシアがウクライナへの軍事侵攻を開始し、自由な環境で関係者が当時の状況を発言できる環境ではなくなってしまい、またも延期せざるを得なくなった。

そこでロシアでの調査はいったん脇に置き、東西冷戦のある意味、最も象徴的ともいえる、東西に分断されていたドイツの実態を調べる内容で調査できないかと考えた。そこでまず、思い出されたのが、中学生のころに聴いていた西ドイツのドイチェ・ヴェレ (DW, Deutsche Welle) である。

1970年代に訪れた、いわゆる「BCLブーム」に乗じて、筆者もラジオを手に入れ海外の短波放送を聴いていた。代表的なところでは、イギリスのBBCや、前述のモスクワ放送、中国の北京放送、台湾の「自由中国の声」など、比較的、受信しやすいものから、「難局」とよばれる受信が難しい局までであった。

当時、中学生だった筆者は、イデオロギーや東西冷戦に関する知識に乏しく、遠く離れた外国から飛んできた電波をつかまえ、海外から直接もたらされる情報ということに対して、単純に心を踊らせていただけだった。のちに記者となって海外特派員となったのも、こうしたことが原点だといえる。

筆者が記者になったのは1989 (平成元) 年である。まさに、この年の11月にベルリンの壁が崩壊した。大学を卒業する直前の同年3月にヨーロッパを旅した際、当時、東西に分断されていたドイツを訪れ、西側からベルリンの壁を見た。東西冷戦の象徴であった壁が崩れ、1990年10月3日、東側のドイツ民主共和国 (DDR, Deutsche Demokratische Republik) は、西側のドイツ連邦共和国 (BRD, Bundesrepublik Deutschland) に吸収される形で再統一された。

世界が東側と西側という2つのブロックに分かれていた当時、筆者は西ドイツのドイチェ・ヴェレの存在は日本語放送を通じて知っていた。一方の東ドイツには日本語放送がなかったため、国際放送を行っているラジオ局があったことすら知らなかった、というのが実態である。そのラジオ局が、ラジオ・ベルリン・インターナショナル (RBI, Radio Berlin International) である。

ベルリンの壁が崩壊してから、すでに30年以上が経過している。ドイチェ・ヴェレは今も存続しているが、RBIは再統一前夜の1990年10月2日に最後の放送を行い、ドイチェ・ヴェレに吸収された。

そこで、冷戦時代のプロパガンダの内情を探るため、RBIの関係者を捜すことにした。その前に、まずは国際放送と東西冷戦について触れてみたい。

2. 国際放送と東西冷戦

イギリスの公共放送BBCの前身であるBritish Broadcasting Company（イギリス放送会社）は、1922年10月に設立され、翌月14日から毎日の放送が始まった²⁾。

その後、英国放送協会へと組織を変え、BBCの放送は世界の人々に利用されてきた。2022年には、BBCの歴史が100年を迎えただけでなく、BBCのラジオ国際放送であるBBC World Serviceも90周年を迎えたと、BBCの年次報告書(BBC Group Annual Report and Accounts 2022/23)では記している³⁾。

報告書の見出しでは、BBC World Serviceが目指すものとして、「イギリスの文化と価値観を世界に反映させる」と記述している。

国際放送は、自国の文化と価値観を世界中の人々に知ってもらうことを主な目的の1つとしている。また国際放送は、国外のリスナーに向けた“架け橋”という側面を持つ一方、とりわけ戦時においては、「情報戦」の“武器”として使われてきた側面があることも事実である。

2.1 国際放送

自国ではなく他国に向けた放送は、国際放送と呼ばれる。NHKも2023年11月現在、ラジオは17言語で、テレビは英語で放送するとともに、ウェブサイトやアプリでは19言語でサービスを提供している⁴⁾。

各国の放送局も、第2次世界大戦前から短波放送などによる国際放送を展開してきた。旧ソビエト連邦が運営していた国際放送局のモスクワ放送も1929年10月からドイツ語による放送を開始し、その後、フランス語や英語などによる放送を実施した⁵⁾。

2.2 東西冷戦

東西冷戦の時代、両陣営とも自陣の情報発信に力を入れてきた。アメリカのVOAは、1947年に当時のソビエト連邦に向けて放送を開始した⁶⁾。1948年からは、VOAは対外宣伝機関であるアメリカ合衆国情報庁(United States Information Agency)の管轄で放送を担ってきた。一方のモスクワ放送も、北アメリカ向けの放送を開始するなど、自陣営の正当性を訴える放送を行ってきた。

2.3 BCLブーム

1970年代、日本でも海外の短波放送を受信する、いわゆる「BCLブーム」が到来した。放送局は、リスナーから送られた受信報告書の内容を確認して、放送を受信できていたことを証明するベリカード(Verification Card)をリスナーに送付していた。ちなみに、1978年当時、中学1年生だった筆者も短波放送を受信できるラジオを手に入れ、高さ3メートルのアンテナを設置して、海外からの放送を受信していた。前述のように、イギリスのBBCや台湾の「自由中国の声」、ラジオオーストラリアなどの自由主義陣営だけでなく、モスクワ放送や中国の北京放送といった日本語放送も主に聴いてベリカードを収集していた。

3. 東西ドイツの放送体制

中学生だった当時、世界史や地理に関する知識に乏しく、もちろん英語力もない。このため、BCL専門の本や雑誌で仕入れた知識をもとに、日本語放送をしている放送局にダイヤルを合わせていた。

西ドイツではドイチェ・ヴェレが日本語放送

を実施していたので、何度か聴取を試みたことがある。しかし、東ドイツから日本語放送を出しているという情報がなかったため、当時、興味を持つことはなかった。

東西ドイツ両国が国連に同時加盟したのは、1973年9月18日。筆者は当時、小学2年生であり、その前年の、パンダが日本に贈られた中華人民共和国との国交正常化のニュースとは異なり、記憶していない。

中学生として海外からの放送を直接、聴取しようという好奇心はあったものの、まだ国際情勢に関する十分な知識は持ち合わせていなかった。

3.1 東ドイツの政治

第2次世界大戦後、ドイツはアメリカ、イギリス、フランス、ソ連の4か国によって占領され、統治下に置かれた。しかし、米・英・仏の3か国を後ろ盾に、1949年9月にドイツ連邦共和国(西ドイツ)が建国され、翌10月にドイツ民主共和国(東ドイツ)の建国が宣言された。東ドイツには5つの政党があったが、実質的には、ソ連軍の後押しを受けたドイツ社会主義統一党(SED, Sozialistische Einheitspartei Deutschlands)による一党独裁体制であった。

東ドイツから西ドイツへ向かう人々の流出が止まらず、1961年8月に、東西ベルリンの境界が封鎖された。その後、ベルリンの壁が建設され、ようやく人々の流出が抑えられた。結果的に、東ドイツは工業国として経済成長するようになる。

3.2 東ドイツの放送体制

NHK放送文化研究所(以下、文研)では、世界の放送局の動向を『データブック 世界の

放送』としてまとめ、刊行してきた。この本の前身となるのが『世界のラジオとテレビジョン』で、日本でテレビ放送が開始された1953年に発行されている。このとき、「ドイツ」の項目には10ページが割かれている。当時の西ドイツにおけるラジオとテレビの状況が記されているものの、東ドイツについては「ソ連管下東ドイツのその他の放送事情は不明である」などと2行だけの記載となっている。

4年後の1957年に発行された『世界のラジオとテレビジョン』では、西ドイツに21ページを割いて詳述している。これに対し、東ドイツの記述は3ページとなっている。「ラジオ」の項目は以下のとおりである。

東ドイツのラジオ放送は、1955年5月13日で運営開始10周年を迎えた。ラジオDDR(Radio Deutsche Demokratische Republik)ドイツ放送局(Deutschland Sender)およびベルリン放送局(Berliner Rundfunk)の3つのネットワークで『ドイツ民主放送(Deutscher Demokratischer Rundfunk)』を組織し、この3組織は政府機関である国家放送委員会(Staatliches Rundfunkkomitee)によって運営されている。委員会は郵政省のラジオ・テレビ局によって組織され、国民の各層、各団体の代表者によって構成されている。委員長は内閣が指令し、その任期は特に定められていない。

以上のような記述に加えて、「国外向け放送」の項目では、「ラジオDDRは、1955年4月に英語、およびフランス語国外向け短波放送を開始し、その後デンマーク語が加えられた。なお、近くアラビア語が加えられることになっている」

との説明が付記されている。

『世界のラジオとテレビジョン』のこの次の発行は1963年である。このときに、初めて東ドイツのラジオ放送の沿革が記載されている。そして「国外向け放送」に関して、以下の記述が登場する。

「ラジオ・ベルリン、インターナショナル、ドイツ民主共和国の声」という名称の下に、英語、ドイツ、フランス、スウェーデン、デンマーク、アラビア、イタリア、ペルシャ、スペイン、ポルトガル語の10か国語（1962年4月現在）を使用して、1日35時間30分（1962年1月現在）の放送を行なっている。

名称の表記こそ一部異なる（おそらく誤植によると推定される）ものの、文研として初めてRBIを扱ったものとみられる。この次の発行となった1965年の『世界のラジオとテレビジョン』では、表記が「ラジオ・ベルリン・インターナショナル、ドイツ民主共和国の声」と改められるとともに、放送言語からペルシャ語が落とされ、9か国語による番組を中波と短波で放送している、と説明されている。

4. RBI (ラジオ・ベルリン・インターナショナル) とは (沿革と組織)

前章で触れたように、RBIに関する日本の資料は少ない。1980（昭和55）年1月に発行された子ども向けのBCLの入門書『〔こどもポケット百科〕入門BCLブック55年版』（山田耕嗣監修、実業之日本社）では、世界の英語放送局20局のうちの1局として、1ページだけ掲載されている。

以下は、当該ページの紹介文の全文である。

ドイツは第2次世界大戦で国がふたつに分かれてしまった。東ドイツのことを正式には、ドイツ民主共和国という。

東ヨーロッパの中で、最高の経済力を誇っている。それだけに、放送は、躍進する東ドイツを紹介するものになっている。

ベリカードも、40種類あって、東ドイツのあらゆるものをとりあげた図柄になっている。何回も受信報告書を送れば、東ドイツの絵はがきシリーズが手元に集まってしまう。日本では東ドイツのことは知られていないから、それは貴重なコレクションになるだろう。

RBIについて調べた先行研究としては、イギリスを拠点とするラジオ愛好家の団体であるBritish DX Club⁷⁾が発行している『Communication magazine』で、2016年6月から8月まで連載された、Sabine Schereck氏による寄稿があり、それらを1つにまとめた計13ページ分の文書「Tracing Radio Berlin International」が、同団体のウェブサイト上で確認できる⁸⁾。

Schereck氏の寄稿によると、RBIは、1959年に正式に設立された。もともと、1955年にラジオDDRが英語とフランス語の放送を始め、続いて、スウェーデン語、デンマーク語、アラビア語の放送が始まったとしている。そして1965年の段階では、アフリカ、イタリア、南北アメリカ、東南アジア向けの放送が導入されたと報告している。その後、スペイン語、ポルトガル語、スワヒリ語のほか、ヒンディー語やギリシャ語での放送もあったという。そして1990



RBIが入っていた建物

(出典：ウィキメディア・コモンズ (Photo: Andreas Steinhoff)
<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=278043>)

年10月3日の再統一の前日である10月2日に閉鎖された。

Schereck氏は、Part IIにおいて、英語放送について記している。最初の数年間の放送時間は1日30分だったが、のちに45分間に拡大されたという。放送の冒頭部分は10分ほどニュースが流され、続いて3分ほどの解説、そしてそのあとの残り時間は、月曜から日曜まで各曜日に、事前に制作したプログラムが放送されていたことなどが記されている。

Part IIIでは、ほかの国際放送局と比較してRBIがリスナーと緊密な関係性を築いていたことや、一方で、当時はリスナーから届く手紙への返事や、放送中でのリスナーからの質問への回答も、政党の方針に従わざるを得なかったことなどが説明されている。その顕著な例として、グラスゴーのリスナーが、ベルリンの壁の崩壊以前にRBIのプロパガンダを批判する長い手紙を送ったが、「RBIはそうした問題について議論するクラブではない」との返信があったと報告する同リスナーからの手紙が、壁崩壊から1週間後の放送で読み上げられたことが紹介されている。

5. RBIの関係者捜し

RBIとはどのような組織だったのか。どのようなプロパガンダを行っていたのか。筆者はNHKベルリン支局を通じて、支局のコーディネート業務を担当したことがある、東ドイツ出身の女性、マヌエラ・ガントゥス (Manuela Ghantus) 氏を2022年12月に紹介していただいた。そしてガントゥス氏に関係者捜しの協力を依頼した。

5.1 関係者捜し

ガントゥス氏にお願いをしたものの、当初はなかなか手がかりがつかめなかった。ようやく該当する人にたどり着いたのが2023年2月に入ってからだった。インタビューに向けて3月にも渡航しようと準備を始めたものの、ガントゥス氏にすでに別の予定が入ってしまっていたため、3月の段階での渡航をとりやめた。関係者の中にはすでに90歳を超えている人もいたため、まずは質問項目を作り、ガントゥス氏を通して、半構造化インタビューを試みることにした。この時点で4人からインタビューに応じると、返事をもらった。

5.2 質問項目

RBIが放送でどのようなプロパガンダを行ってきたのかを聞き出すために、事前に質問を用意した。骨子は以下のとおりである。そして、相手の答えによっては、さらにその詳細について聞き出す半構造化インタビューの手法で、RBIによるプロパガンダの実態に迫れないかと考えた。

- ① RBIに所属したのはいつか。動機やきっかけは

表 聞き取りに応じたRBIの関係者一覧

名前	ハインツ・ オーデルマン Heinz Odermann	マルティン・ ボーネ Martin Bohne	ジョニー・ グランゾウ Jonny Granzow	ヘルマ・ ハリントン Helma Harrington	ハンネローレ・ シュテア Hannelore Steer	フリーデマン・ シュレンダー Friedemann Schlender
性別	男	男	男	女	女	男
年齢	94	69	91	85	81	81
RBIでの 最終肩書	副編集長	副編集長	副編集長	編集長	編集長	編集長
主な 担当地域	ラテンアメリカ、ア フリカ、アラブ諸国、 インド、東南アジア	フランス	フランス	ラテンアメリカ	アフリカ	インド
入局年	1959年	1984年	1956年 (RBI開始前)	1961年	1967年	1965年
DW勤務	なし	あり	なし	なし	なし	あり
インタビュー	3/2, 9/9	3/3, 9/8	9/13	2/28, 9/14	3/2, 9/12	9/14

※2月28日、3月2・3日は、筆者の質問をもとにマヌエラ・ガントゥス氏に代理でインタビューを実施してもらった
※年齢は2024年1月末現在

- ② 主に担当した業務とリスナーに果たした役割
- ③ RBIの放送での基本方針
- ④ 業務のワークフロー
- ⑤ 放送内容はどのように決められたか
- ⑥ どんな内容がリスナーに人気だったか
- ⑦ 政党や上層部から内容について指示はあったか
- ⑧ どういうルートで指示があったか
- ⑨ 放送では何を伝えることが最も重要だったか
- ⑩ 国外に向けて放送する意義は何だったか
- ⑪ 国外のリスナーとの関係をどのように保ったのか
- ⑫ どれくらいの手紙が届き、何が書かれていたか
- ⑬ 内容について上司から変更を求められたことはあったか
- ⑭ 西側からの放送を当時、どのように受け止めていたか
- ⑮ 国際放送の意義をどう考えるか
- ⑯ ウクライナへの軍事侵攻に対し、ロシアから発信されている情報をどう感じているか

5.3 関係者の一覧

結果として、2月から3月にかけて筆者は直接、質問できなかったのだが、4人からインタビューをとることができた。そして筆者が9月にドイツを訪れた際には、この4人への再インタビューに加えて、新たに2人からインタビューの了承をとりつけ、計6人から話を聞くことができた(表)。

6. 担当者からの聞き取りで判明したこと

6人以外にも接触をした方は数人いたものの、了承していただけなかった。交渉にあたってくれたガントゥス氏によると、RBIの関係者に限らず、旧東ドイツ時代のことを話しながらない人は少なくないという。

そうした全体状況がある中で、今回、調査に協力してくださった方に改めて感謝の意を表したい。ただし、あらかじめ断っておくが、証言の信頼性、信ぴょう性については必ずしも

100%保証できるものではない。一般論の範ちゅうにはとどまるが、人間の記憶というものは正確ではなく、思い込みによる勘違いを起すときがある。また、自身にとって不都合なことを語らず、結果として事実関係と異なる解釈をもたらす場合もある。

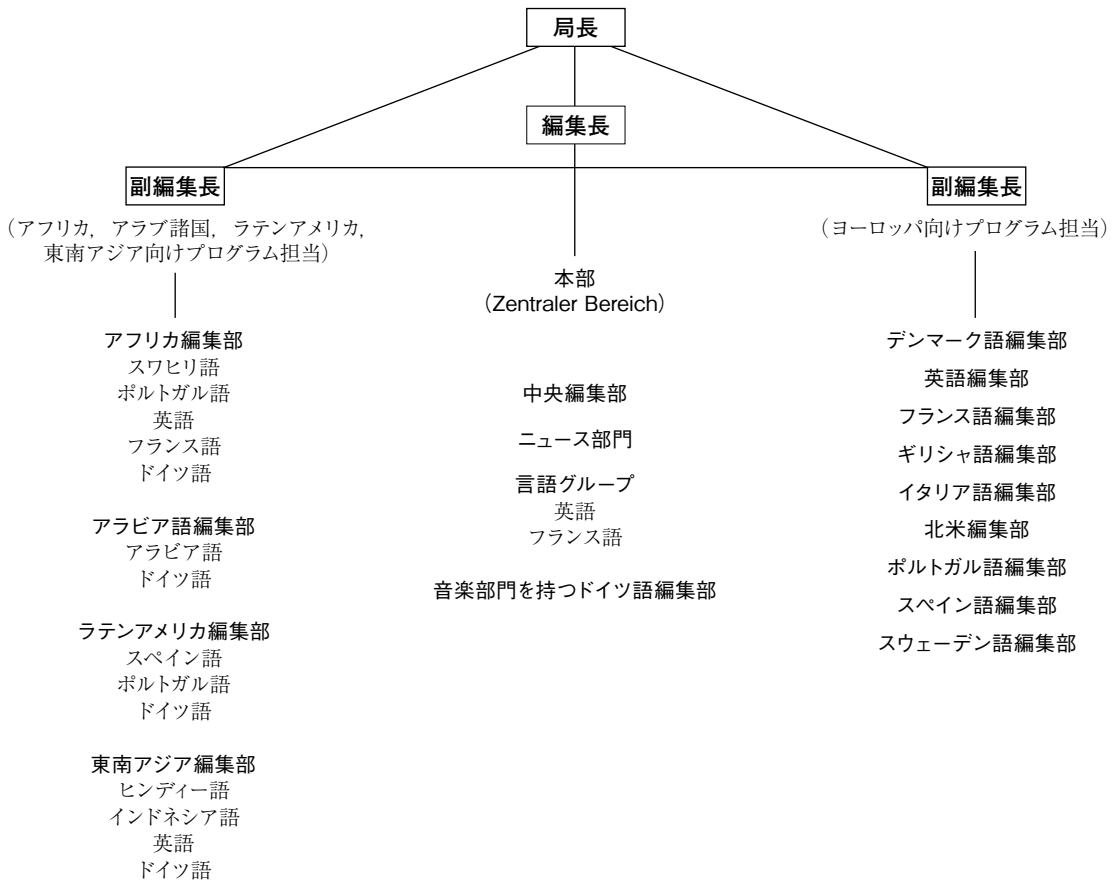
今回の調査は、司法による捜査のような強制力はなく、あくまで任意の協力のもとに行われたものである。調査にあたった筆者としては、証言の内容を善意に基づくものとして受け止め、本稿をまとめている。ただし証言者本人が意図的あるいは無意識的に語った、事実

と異なる内容が含まれている可能性についてもあえて言及しておきたい。

6.1 RBIの組織

RBIの正式な発足は1959年5月。ドイチェ・ヴェレに対抗する形で組織された。関係者の話を総合すると、RBIの基本方針は、ドイツ社会主義統一党 (SED) の中央委員会の政治局が決定していた。ハインツ・オーデルマン氏によると、SEDの中央委員会の政治局員のヘルマン・アクセン (Hermann Axen) が国際問題担当の責任者としてRBIを管轄していたという。アクセ

図 RBI組織図



※ Heinz Odermann 著『Wellen mit tausend Klängen』（日本語訳：『千の音が響く波』）P254をもとに筆者作成

ンは、ユダヤ人として18歳のときにアウシュビッツの強制収容所に送られたが、生き延びた。

4週間に1度のペースで、アクセンのもとにRBIを含めたメディア関係者が集い、基本方針について指導を受けた。

今回、聞き取りに応じてくれたオーデルマン氏の著書に、RBIの簡単な組織図が掲載されていた(図を参照)。この会合にRBIからは編集部のトップが出席し、伝達された内容を、各編集部に周知した。

RBIは英語、フランス語、アラビア語など、最大17か国語で放送された。主要な言語で編集部が組織され、言語ごとの独自の内容のプログラムが制作されていた。

ベルリンの壁が崩壊した翌年の1990年10月3日に東西のドイツが再統一された。RBIはその前日の10月2日に最後の放送を出して役割を終え、統一後のドイツの国際放送はドイツ・ヴェレが担うことになった。

6.2 番組編成と放送内容

RBIの番組の基本構造としては、冒頭部分に各言語に翻訳されたニュースが10分ほどあり、残りの部分で、各言語の編集部が、リスナーから寄せられた手紙を扱うコーナーなど、それぞれの地域向けのプログラムを制作していた。また、アフリカやインドなどの人にとっては、なじみのないヨーロッパの大都会に関するような話題については積極的には扱わず、リスナーが関心を持てる内容に再構成・修正するなどしていたという。

6.3 リスナー層とリスナーズクラブ

主なリスナー層は、社会主義にも関心がある10代後半～30代の若者だったという。また、

「DXer」と呼ばれる、短波放送の遠距離受信を楽しむ愛好家たちだったという(日本のBCL愛好家も、DXerと自称することがあった)。

手紙を送るリスナーの多くは、自身の名前が放送で取り上げられることに喜びを見いだしていた。編集部に宛ててプレゼントを贈るリスナーも多かったという。また、RBIからもリスナーに向けてプレゼントを贈ったり、数は多くないものの、懸賞としてリスナーを東ドイツに招いたりすることもあったという。

さらに、世界の各地に、RBIのリスナーで組織されるリスナーズクラブが設立された(リスナーズクラブ自体はRBI特有のことではなく、ほかの国際放送でもみられた)。ガーナでは、RBIとドイツ・ヴェレのリスナーズクラブ同士でサッカーの試合が行われていた。そのことを知ったRBIからサッカーボールとともに、相手チームを破るよう激励のこぼしが贈られたこともあった、との証言があった。

6.4 プロパガンダをめぐる認識

プロパガンダという用語を定義することは難しいが、一般的には「宣伝。特に、ある政治的意図のもとに主義や思想を強調する宣伝」(『大辞泉』)とある。英英辞典のOxford Learner's Dictionaries のオンライン版では「ideas or statements that may be false or present only one side of an argument that are used in order to gain support for a political leader, party, etc. (筆者訳: 政治指導者や政党が支持を得るために用いる、虚偽や一方的な考えあるいは言説)」となっている。

冷戦時代のプロパガンダについては、一義的には、東西の両陣営がそれぞれに有利な情報を宣伝する行為ととらえる。ただし、今回聞

き取りに応じてくれた6人の間でも、担当者によって、プロパガンダに対する定義や認識が異なっていた。あえて分類すると、次のような3つのタイプにまとめることができる。

- (A) プロパガンダだったと認める人
- (B) よい面だけを伝え、不都合なことを伝えなかっただけだと主張する人
- (C) プロパガンダだったとは認めない人

いずれも、RBIの放送の目的は、東ドイツ（ドイツ民主共和国）の外交的承認を促進することだったという。

このうち、(A)のプロパガンダだと認める人にも濃淡はあった。嫌でしかたがなかった、と感じる人もいれば、社会主義のよい面をアピールすることは当然だ、という認識の人もいた。

(B)の人については、現代における偽情報とは異なり、「うそはついていない」として、当人はプロパガンダであるとは思っていないととらえている。しかしながら、第2次世界大戦前にアメリカにあったIPA（プロパガンダ分析研究所、Institute for Propaganda Analysis）は、プロパガンダの手法として7つを挙げている。そのうちの1つが「カードスタッキング」⁹⁾と呼ばれる「自らの主張に都合のよい事柄を強調し、都合の悪い事柄を隠蔽またはねつ造だと主張する」という手法である。仮にRBIの担当者が自覚していなくても、こうした手法をとっていたのであれば、プロパガンダに相当するものと考えられる。

また、(C)の「プロパガンダだったとは認めない人」は、プロパガンダの定義そのものが曖昧である、と指摘する。この点についての指摘は一部、正鵠を射ていると筆者も個人的には首肯できる部分がある。そのためもある、今回の調査を実施したという経緯がある。

7. 個別の聞き取り内容

この章では、実際のインタビューから抜粋して紹介する。なお、基本的に本人の証言にのっつってはいるものの、紙幅の都合とわかりやすさのため、話を要約・整理して紹介しているところがある。また、理解しづらい用語などについては、「解説」として意味合いや時代背景などの説明をつけて補足した。

7.1 ハイנטツ・オーデルマン氏

（主な担当地域：ラテンアメリカ）

● RBIでの仕事の目的と内容

私の仕事は、ラジオ番組を通じ、ドイツ民主共和国（東ドイツ）の外交政策の好ましい点を強調し、外交的承認を促進することでした。例えば、アラブ諸国向けの放送では、帝国時代から始まるドイツとアラブの関係の歴史を調べるのが、RBIに所属してから約9年間の私の専門になりました。私は毎日、通信社から送られてくるニュースに目を通し、例えばイギリスやフランスなど西欧諸国との接点がどこにあるのかを探しました。放送を通じて、何らかの形で共感を促す接点があるかです。



ハイנטツ・オーデルマン氏 (94歳)

● 1973年のチリ軍部クーデター

南米のチリで、ピノチェトがアジェンデ大統領を打倒したときでさえ、私たちはチリの人々が大統領を倒したあとに何をすべきかを伝えることはしませんでした。それは他国の内政に介入することになるからです。そんなことは許されませんし、したくなかったのです。それは私たちの仕事ではありませんでした。しかし、平時のドイツとチリ関係を強調すること、歴史上、多くのドイツ人がチリに移住した点を強調することは私たちのテーマでした。要するに、東ドイツの外交的承認を促進するために、過去の良好な関係を強調することでした。

解説：チリ軍部クーデター

チリ社会党の指導者で、1970年の大統領選挙で当選したサルバドル・アジェンデ (Salvador Allende) 大統領の左派政権が、陸軍総司令官だったアウグスト・ピノチェト (Augusto Pinochet) 率いる軍部のクーデターによって1973年に打倒された。戒厳令が敷かれ、ピノチェトは翌1974年6月に大統領に就任し、1990年3月まで軍事政権が続いた。

● RBIの基本方針

RBIの基本方針は、ドイツ社会主義統一党の中央委員会の政治局が決定しました。当時はヘルマン・アクセンの指導下にありました。彼はドイツ社会主義統一党の中央委員会の国際問題担当の最高責任者でした。月に1回、個々の問題について、どのように発表するかについて話し合いが行われました。それが私たちの基本的な方向性でした。この方向性の決定は、ヘルマン・アクセンとの対話の中で、口頭で行われました。私たちはそれを“議論セッション”と呼んでいましたが、厳格なものではありません

んでした。彼は亡くなるまで国際問題担当の最高責任者で、国民の間でも大きな共感を得ていました。大げさな言い方をすれば、彼は“われわれのジャーナリズムの父”でした。

私はラテンアメリカ、アフリカ、アラブ諸国、インド、東南アジア担当の副編集長になったあと、これらの話し合いに出席しました。ディスカッションを含め、会議は2時間ほど続きました。RBIのほかにも、国際報道に携わる新聞やテレビの代表も参加しました。こうして毎月、国家指導者の代表と会っていました。基本的には「指導」でしたが、そう感じさせないので、彼と話すのは楽しいものでした。それは対話でした。そこでは自分の意見を言うことができました。

● 放送内容の決められ方

RBIの編集部には3人の責任者がいました。ヨーロッパ担当、非ヨーロッパ諸国担当、もう1人が全体担当でした。(政党や上層部からの)指示はありませんでしたが、会議の最後にこう勧告されました。「外交政策のすべての分野において、あなた方はこのように行動すべきです。これがあなた方の仕事の方向性です」と。

ヘルマン・アクセンとのミーティングは平均4週間ごとで、重要な出来事があれば早まることもありました。

RBIは、中央委員会の「アジテーション(扇動)とプロパガンダ(宣伝)」の下部組織ではありませんでした。ドイツ社会主義統一党の中央委員会の書記として、ヨアヒム・ヘルマン (Joachim Herrmann) がアジテーションとプロパガンダを担当していました。私たちはヨアヒム・ヘルマンのアジテーションにさらされることはなく、ヘルマン・アクセンが私たちの議論の相手でした。彼は友人であると同時に、広

い意味では上司でもありました。

私たちの原則は、他国内政に干渉しないことでした。私たち自身がそう確信していたので、その点については厳格でした。

例えば、アジェンデ政権が崩壊したあとのチリでさえ、干渉はしませんでした。それは私たちの仕事ではありませんでした。私たちの仕事は、事実上の関係を維持することではなく、チリ国民との連帯を世界に広めることでした。アメリカ帝国主義は、外国情報機関とともに、銅鉱山で働く労働者たちにアジェンデの社会主義政権を打倒するよう呼びかけました。このようなことばがわれわれの番組で使われることはありませんでした。それはわれわれの方針ではありません。

RBIでは、話し合いは自由でした。「ベルリンの壁はひどい」と言う職員もいました。

これについては、私もひどいとは思いましたが、もし壁を作らなければ、来週には東ドイツは存在なくなってしまう。壁を作らなければ、医者のような専門職に就く人々はみんな西側に逃げてしまうだろう、と思っていました。壁があるのは当然のことで、それは東ドイツを存続させるためでした。しかし、行き過ぎもありました。

国境に設置された爆薬です。あれは非人道的でした。

質問:リスナーは壁の建設について質問したか。

はい、1961～68年の間に何度も。それ以降はもうありませんでした。それからはもう誰も求めなくなりました。リスナーからの手紙はたくさん来て、あまりに多かったので、しばらくは決まった形で返事をしていました。

率直に答えることが許されていました。

● リスナーズクラブ

ラテンアメリカ編集部では、リスナーからの手紙に、番組を宣伝するような形で返事をするようになっていました。最初のうちは、すべての手紙に形式的な回答をしていました。そこで私は心理学者を雇い、手紙を心理学的に評価することにしました。接点はどこにあるのか？手紙は私たちのプログラムについて何を語っているのか？

リスナーからの手紙を扱う職員もいました。彼らの立場を一人前の編集スタッフとして格上げし、リスナーが何を考えているのか、編集者にヒントを与え、それを番組に反映することもできるようにしました。そしてこれは、リスナーズクラブの推進というアイデアへと発展しました。

リスナーズクラブの基本原理は、番組のテーマに関する対話への関心を喚起することであり、地域のリスナーが番組で表現された考えを吸収しやすくするというものです。短波リスナーは特殊なタイプのリスナーです。彼らは、家事と並行してではなく、意識的にチューニングして番組に耳を傾けます。彼らは東ドイツと西ドイツを比較したかったのです。アラビア語の放送でインドのリスナーズクラブについて報道したあと、さまざまな国のリスナーが率先して自分たちでリスナーズクラブを立ち上げました。また、インドやアルジェリア、ペルーだけでなく、スウェーデン、フランス、北イタリアにも多くのリスナーズクラブがありました。彼らはほとんどが18歳から35歳ぐらいまでの若い男性でした。

● リスナーズクラブとの交流

ガーナに、RBIのリスナーズクラブとドイチェ・

ヴェレのリスナーズクラブがありました。彼らと一緒にサッカーをしているということでした。私たちはサッカーボールを手に入れ、RBIのリスナーズクラブに「ドイチェ・ヴェレが支援するサッカー・チームとの対戦で多くの勝利と成功を祈ります」と書いてボールを送りました。

私たちも、いろいろな国からプレゼントを受け取りました。例えば、チュニジアからはナツメヤシの実が定期的に送られてきました。

私たちはいつも、番組で彼らの名前を読んでお礼を言いました。しかしその前に、名前を出していいかどうかを手紙で尋ねました。彼らの中には政治的に迫害されている人もいたからです。チリ人については、クーデター後は名前を出しませんでした。

また、リスナーズクラブのメンバーやリーダーを招待し、ホテル代を負担したこともあります。私もチュニジアから来たリスナーズクラブの会員を、蒸気船の旅や、博物館に連れていったことがありました。誰かを招待して接待するのは、各編集部で1度あるかないかのまれなことでした。あったとしても航空券が高かったもので、それほど遠くない国の人に限られていました。

● RBIが重要視したこと

重要としたのは、東ドイツとの友好が築かれることでした。番組が、民族間友好と平和維持に貢献することが重要でした。オランダなど他国で行われている平和研究にも焦点が当てられました。それにより、リスナーは東ドイツが平和に尽力していることを認識するようになりました。放送地域の国々の文化についても語ることで、民族理解が促進されました。自国のことだけを報道するのではなく、放送地域の人々の

名誉や道徳観についても常に考慮しなければなりませんでした。

● 国外向けに放送した意義

(東ドイツの)放送局の中では、RBIの地位は低かったのです。ベルリン放送、ラジオDDRなどは、それぞれ自らを最も重要な放送局だと考えていました。RBIは車の5つ目の車輪でした。ドイツ民主共和国ラジオ国家放送委員会の委員長が開催する会議に時々参加しましたが、そこでもRBIの報告はいつも最後でした。ラジオ局の各代表は自分たちの番組について報告することになっていましたが、RBIは忘れられることさえありました。しかし、外務省や中央委員会の政治指導者の間では、国外向け放送はかなり高い位置づけにありました。

● 西側の放送についての受け止め

西側の放送に関しては、私たちがよく議論したテーマでした。私たちはごくまれにしかドイチェ・ヴェレを聴きませんでした。放送の基本的なことしか知らなかったのです。

必要なときには、西ドイツの政策を客観的に扱い、例えば東ドイツの孤立化について、私たちの考えを述べました。それはテーマの1つでした。それ以外に、西側メディアを相手にすることはありませんでした。私たちは私たちの国について放送しました。だからといって、西ドイツの政治について発言しなかったわけではありません。なぜドイツに2つの国があるのかも説明しました。それはドイツ国民の望みではありませんでしたし。

他方で、私はいつも西側のメディアに接していた1人です。RBIがあったナレパストラセの書庫には『Stern』(西ドイツの雑誌)が

ありました。「Der Tagesspiegel」「Die Welt」「Frankfurter Rundschau」といった、とてもよい西ドイツの新聞がありました。個別に提供される新聞もあり、私は主に「Frankfurter Allgemeine Zeitung」を読んでいた。それを通じて、西ドイツの政治が何を言い、何を報道しているのかを知ることができました。

7.2 マルティン・ボーネ氏 (主な担当地域：フランス)



マルティン・ボーネ氏 (69歳)

● RBIに入ったきっかけ

1984年9月から1990年1月までRBIで働き、ベルリンの壁が崩れた時代も体験しています。

RBIに入れたときはとても幸せでした。東ドイツのほかのラジオ局で流布されていた、プロパガンダ的なたわ言を広める必要はなかったからです。

● RBIの基本方針

RBIは国家放送委員会の一部であり、それはドイツ社会主義統一党の中央委員会の「アジテーションとプロパガンダ」を通じて非常に厳密に運営されていました。委員会にはプロパガンダを担当するメンバーもいました。というのも、同時に、中央委員会には、マルゴット・ホーネッカー(Margot Honecker, 筆者注：エーリッヒ・ホーネッカー[Erich Honecker] 国家評議会議長の妻)の弟が率いる海外情報部があったからです。彼はRBIの責任者でもあったので、二重のコントロールと二重のリーダーシップがあったわけです。

編集長たちは、常にそこから指導を受けていたのです。情報の伝達は非常に厳密でした。中央委員会の責任者と必須メディアの編集長との会議から始まり、そこには国家放送委員会

の委員長かその代理が出席し、RBIを含めた各局の責任者に情報を伝えました。午前10時半に編集長を招集してその日のスローガンを発表し、昼食前に編集部の責任者が職員に伝えました。毎日、指導のセッションがありました。編集長や副編集長がいないときは、私もこの会議に出ました。世界情勢をどうみるか、何をどう報道するか、どの話題を強調するか、どの話題はタブーか、話してはいけないか、どのことばを選ぶか、などなど。それは非常に詳細なものでした。

● 番組に関する内容変更の指示について

要求された変更は文体に関するもので、どちらかというとジャーナリスティックなものでした。しかし、私はそこに挑発的であったり政治的に攻撃的であったりするようなものを書いた覚えはありません。そんなことはなかったと思います。

質問：それをしなかったのは、仕事を失いたくなかったからか。

ええ、もちろんです。あれは精神的に引き裂

かれた状態に近かったですね。今ではそれを想像できないでしょうね。この国、このシステムで一生を過ごさなければならないという確信のもとに育ちました。壁の崩壊と統一が可能だとは、誰も思わなかったのですから。

1980年代末になると、ソ連のゴルバチョフ書記長の影響もあって、大きな問題があることが明らかになってきました。そのころ、私的な討論会を開いていました。みんなで本を読んで、それについて議論することを目的としていました。そこでは、東ドイツで起きていることを好ましく思わない反対派の人たちが集まっていました。当時、東ドイツをよくしようという理想を持った人が多かったのです。

一般的に、RBIで働く人々は東ドイツに好意的でした。多くは本当に狂信的でした。私は彼らに対して、このシステムに対する疑念を述べることはありませんでした。

私たちは常に会議に出席していました。人々は自分の聞きたいことを話していました。ある会議で、私はとても疲れていて、目を閉じていたのですが、眠ることは許されなかったのを覚えています。ひどいものでした。しかも、それが月に3回もあったのです。それから、党員研修会というものもあって、何かを学ぶことになっていました。壁が崩壊してそれが終わったとき、私はとてもうれしかったです。

1987～88年の話ですが、当時、自由ドイツ青年団(FDJ)という、ドイツ社会主義統一党の青年団がありました。RBIにも自由ドイツ青年団があり、すでに若者ではない30歳まで所属し続けなければなりませんでした。そして、RBIの自由ドイツ青年団の組織の中で選挙が行われました。誰が書記になるかは、すでにRBIの党組織が決めているというのが通常のやり方

でした。しかし、実は1度だけ、このときの選挙では対立候補が出ました。党が望んだ候補者は、まったくの無能でした。一方、対立候補はとても人気がありました。彼女は反対派ではありませんでしたが、何か違うことをやりたかったのです。彼女はもう少しオープンでした。彼女は問題についてもっと議論したいと考え、選挙に勝ちました。

その後、かなりのトラブルがありました。彼女が立候補したことは問題視されましたが、党から処罰されることはありませんでした。彼女は党に所属していなかったからです。選挙でこの対立候補に投票した党員は、党の規律に違反したとして処分されました。党が強くなるために党員は常に団結しなければなりません。“党は常に正しい”のです。

● 国外向けに放送する意義

国外に向けた放送は、非常に重要だと考えられていました。ドイツ社会主義統一党の中央委員会の中に、これを扱う特別の部門がありました。それが始まったのは1950年代です。RBIが設立されたのはそのときです。多額の資金が投入された最も重要な課題は、1970年代まで東欧圏以外のごく少数の国にしか認められていなかった東ドイツへの理解を呼び起こすことでした。西ドイツは、自分たちに単独代表権があり、東ドイツを承認した国があれば、その国とは国交を断絶する、と言っていました。それは1960年代まで続きました。それが「ハルシュタイン・ドクトリン」でした。RBIの目的の1つは、市民社会、つまりこれらの国の人々と接触し、関係を結んでいくことによって、これらの国が東ドイツを承認するように圧力をかけることでした。これは1973年にほぼ達成されまし

た。1973年、東ドイツは国連に加盟しました。ほとんどすべての国に承認されていました。その後のテーマは、東ドイツについて、ポジティブな報道をすることでした。

解説：ハルシュタイン・ドクトリン

1955年に西ドイツがとった外交政策。ソビエト連邦以外で東ドイツを国家承認した国家と国交を断絶するとした。1969年5月に事実上廃止。名称は当時の西ドイツの政治家ハルシュタイン氏の名前に由来。

● RBIで働き続けた理由

政治的には全部、嫌でしたが、それでもRBIで働くのが好きだったのはなぜか。欧米の情報を手に入れることができたからです。フランス語の編集部ではフランスの日報「Le Monde」を購読していました。それは毎日届きました。私は長い間、毎日「Le Monde」を読んでいた。まともに読んでいたのは私だけだったと思います。本来は許されないことでしたが、その新聞を家に持ち帰りもしました。

さらに、東ドイツの通信社であるADN (Allgemeiner Deutscher Nachrichtendienst) からの情報も受け取りました。それはADNが政治家向けに編集した、欧米側の新聞からの情報でした。私たちもそのようなコピーを入手しましたが、そこには政治的検閲がされていない、欧米側の新聞に書かれていることがそのまま載っていました。だから私は、世界で起きていることすべてについて、とてもよく知っていました。私は国際政治に非常に興味を持っていたのです。

私は特に、東ドイツが評価されることを達成しようとしていたわけではありません。ラジオ局の目標にも興味がありませんでした。私個人と

しては、RBIで働くということは、興味のある仕事で、欧米側から情報を得る機会があり、さらに外国に行けるという希望があったからです。それがRBIで働く個人的な理由でした。政治的な何かを成し遂げたいわけではなく、使命感に燃えていたのでもありません。多くの人は、社会主義を素直に確信していました。彼らを非難するつもりはまったくありません。彼らは現実に対する見方が違っていました。それは生い立ちに由来するのかもしれませんが。どんな理由にせよ、私は彼らを非難しませんでした。意地悪な同僚もいました。私はそれをいいとは思いませんでしたが、同僚のほとんどはいい人でした。

私が気になったのは、党の書記や、党の会議中の集団的な圧力で、言いたくないことも言わざるを得なかったことです。それが常にプレッシャーでした。完全に違和感を持っていました。

私は西ドイツのテレビを見て、西ドイツのラジオを聴くだけでした。東側のものといえば『Aktuelle Kamera』（東ドイツのニュース番組）を見ただけです。私は西側のラジオと西側のテレビで育ちました。西側のすべてを信じたわけではありませんが、少なくとも東ドイツのメディアは信じませんでした。だから、私にとって西側のテレビはすでにずっと重要な情報源でした。

そして、私の生活の周囲の人々は皆、同じように考えていました。

7.3 ジョニー・グランゾウ氏 (主な担当地域：フランス)

● RBIで働ききっかけ

私とRBIとの関係は1956年に始まりました。当時、東ドイツのラジオ局の外部部に勤めて

いた青年が、私を誘ってくれました。ベルリンにあるラジオ局の外信部に行き、そこでヴェルナー・ヘンドラー（Werner Händler）氏と面会しました。当時の私は、彼が何者かを知りませんでした。のちに、彼が、ナチス時代に父親とともにレジスタンス活動に参加していたことを知ったのです。

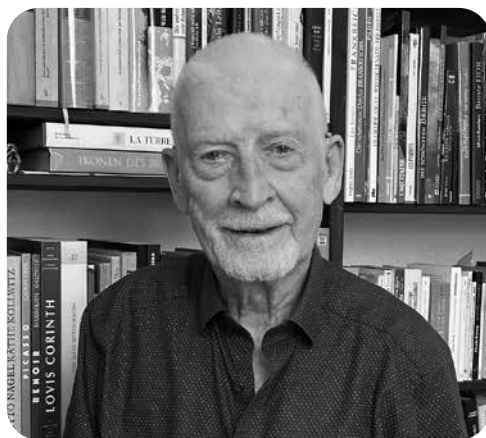
彼らはザクセンハウゼンの強制収容所にいました。ヘンドラー氏はイギリスに逃れられたものの、父親は逃げられませんでした。彼の家族はアウシュビッツで殺されました。私の家族もナチスに対するレジスタンス活動をしていて、家族4人が投獄され、2人が殺され、2人が生還しました。

ヘンドラー氏から仕事を勧められて、同意はしたものの、編集部で働くということについて自分自身、信じられない思いでした。まずは週に2度、ニュースを紹介するフリーランスのプレゼンターとして働き、1958年に編集部に入りました。そして1959年にRBIが正式に設立されました。

● 反ファシズムが基点

私の家族は反ファシズムでした。私にとっては、「ブーヘンヴァルトの誓い」、つまりブーヘンヴァルト収容所が解放されたときの「もう戦争はしない、ファシズムは二度と興させない」という思いが決め手でした。私は、新しい別のドイツを建設するという世代の一員です。

実際、RBIは正式には1959年に設立されていますが、それ以前もラジオDDRが外国放送を行っていたので、放送に必要な設備はすでにありました。放送の言語も段階的に増えていき、RBIの放送は、ほぼ世界中で聴けるようになったのです。



ジョニー・グランゾウ氏 (91歳)

そして、好むと好まざるとにかかわらず私たちは冷戦に巻き込まれ、冷戦において私たちの立場を代表するようになりました。西側やほかの地域に住んでいるリスナーは、西側の主張を知っていて、多くの場合、非常に好奇心が旺盛で東側の主張を聞きたがっていました。その結果、リスナーが増えていきました。

放送について言いたいことがあります。私たちはあらゆるところでインタビューをし、レポートを作りましたが、当初は、ファシズムの犠牲者にささげる番組を主に作りました。ナチス関連の公文書が保管されているポツダムでたくさん取材しました。

西ドイツの司法当局に、ファシズムに反対していた人々に対する死刑判決や実刑判決に関与していた弁護士が、大勢いたことを繰り返し指摘してきました。2つ例を挙げます。

1つ目は、よいほうの例です。死刑判決のファイルには通常、最後に「17秒後に死亡」などと書かれています。つまり、刑の執行が完了したという意味です。1度だけ、死刑判決を受けた2人のフランス人のファイルに、死ぬまでにどれくらいかかったかという記録がないのを

見つけました。気になったので、私はフランスに向けて手紙を書きました。するとその後、フランスから手紙が届きました。そこには、「私たちは生き残りました。ケルンにあるどこかの施設に収容されていましたが、空襲のせいで脱出することができ、その結果、殺されずに済みました」と書かれていました。一方、ファシズムに反対していた私の叔父は、1943年の9月10日に絞首刑になりました。

もう1つ、悪いほうの例を挙げます。強制労働者としてドイツに来ていた17歳のフランス人少年のケースです。彼は夜、バラックで凍えていました。がれきの山を通りかかると、毛布の切れ端が出ているのを見つけました。そこで彼は夜、それを使おうと毛布を引っ張り出して使いました。誰かがそれを見ていました。そして彼に死刑が宣告され、処刑されました。これらを放送したのは、1959年か1960年だったと思います

時には国外でもリポートを行いました。それほど頻繁ではないですが、モスクワの世界労働組合会議に行ったこともあります。そのときは中距離ミサイル配備に反対する大規模なデモが行われました。パリにも行ったことがあります。

● リスナーとの交流

放送が始まった初期のころ、きょうの放送を聴いたリスナーは満足してくれるだろうかと自問していました。その後、リスナーから手紙や受信報告書が送られてきました。中には、お孫さんが生まれた話や、身の回りのことも知らせてくれたものもありました。リスナーにとって、私たちは家族のような感覚があったのかもしれませんが。アイスランドにいたフランス人のコックからも手紙をもらいました。手紙には「ホテルの前



RBIからリスナーに送られたペナント
(マルティン・ボーネ氏所蔵)

を今、流水が通りすぎている。来年、犬ぞりを手に入れて、雪に覆われた世界に出かけていきたい」と書かれていました。

短波で放送していたため遠くまで電波が届き、オーストラリアからでもしっかり受信できた、と手紙をもらったこともあります。われわれが意図した受信者ではありませんでしたが、興味深い出来事でした。

私たちが届けたかったリスナーの例として、ベルギーがあります。ベルギーのあるリスナーからの手紙には、短波放送が受信しにくいと書かれていました。モスクワ放送と電波がかぶるということでした。オーストリアでも同じことが起きていました。RBIは中波でも放送を出していたので、彼は中波に切り替えて聴くようにしたそうです。

1990年、RBIが存在していた最後の年の5月に、リスナー20人分の住所をポケットに入れてトラバント(東ドイツの自動車)でフランスとそ

の周辺に行きました。このうちの7人と会うことができました。いつも絵を描いて送ってくれていたフランス人のリスナーとも会うことができました。別のリスナーは、第2次世界大戦のとき、スペインとフランスを結ぶ機関車の運転士をしていました。ファシストが優勢になったとき、彼は共和国軍の将校たちを石炭の下に隠してスペイン軍から守りました。そのときに聞いた話を、フランスの建国記念日である7月14日にレポートとして放送しました。

質問：RBIの番組やことばは、「架け橋」だったのか、それとも「武器」だったのか。

私からは、このように答えましょう。私たちの主な仕事である、東ドイツに関する描写に限っては「架け橋」でした。そして、冷戦の行き過ぎに関する限り、私たちは東ドイツに対するうそから身を守るため、実際、放送を「武器」としても使用しました。私たちが攻撃されていると感じたときの対抗兵器としてですね。

私がRBIに在籍していた初期のころは、状況が非常に緊迫していました。

私たちは、西ドイツが再軍備化しているという事実に関して、西ドイツの司法における元ファシストの活動に対し、反対する放送を意図的に行いました。しかし、その後、私たちは紛争を望みませんでしたし、東ドイツと西ドイツの間にも一定の和解と協力が生まれました。

「ハルシュタイン・ドクトリン」は、東ドイツに対する露骨な攻撃でした。そして、西ドイツのこの政策に反対したことは、私たちが正しかったことの何よりの証拠です。東ドイツが国連に加盟し、オリンピックに参加したとき、私はカナダにいました。遠く離れた地で西ドイツと東ドイ

ツの国旗がそこに掲げられていました。東ドイツは、1976年のモントリオールオリンピックに関しては平等な参加国でした。

私たちの活動は、ただ認めてもらうために闘ってきたというだけではなく、認めてもらえていることを確認し、自信を持って闘い続けてきたのだと感じました。

私の記憶が正しければ、冷戦が最悪だった時代には、もちろん、私たちも「武器」をうまく利用しなければなりません。しかしデタント（緊張緩和）によって東ドイツは認められ、国連などにも参加するようになり、「武器」は二次的なものになりました。

質問：冷戦時代のメディアのふるまいから何を教訓とすべきか。

最初の教訓は、メディアは火に油を注ぐような悪用を許すべきではないということです。対立自体は否定されるべきではないですが、あおるべきものでもありません。

メディアという点でいえば、自分たちに反対する人たちを敵と見なすような眼鏡をかけるべきではないでしょう。広い視野の眼鏡が常に必要です。もし相反するものがあるとしても、「架け橋」についても同時に考慮しなければなりません。

結局のところ、プロパガンダは東側でも西側でも行われました。こうしたことは21世紀の今も起こっています。一例として、ロシアのウクライナへの軍事侵攻があります。20世紀で懲りたはずなのに、今も戦争はどこかで起きています。とりわけヨーロッパの中心部では、多くの教訓を学んだはずで、許されないことです。私たちはどうにかして互いに歩み寄りなければならま

せん。ウクライナの人々のヒロイズムを疑うつもりはまったくありませんが、その背後にいるのはプーチンです。兵器によって状況を変えられるということに私は疑念を抱いています。

ロシアのプロパガンダは論外です。確かに、いたるところでプロパガンダは行われてきましたし、効果があったという事実はあり、今もロシア国民に大きな影響を与えていることは明らかですが、あまりにひどすぎます。



ヘルマ・ハリントン氏 (85歳)

7.4 ヘルマ・ハリントン氏 (主な担当地域：ラテンアメリカ)

● 担当地域への共感

冷戦の時代でした。東ドイツは、東側以外では政治的に認められていませんでした。この小さな国のためにポジティブなプロパガンダを行い、共感を呼び起こし、東ドイツの政治的立場を提示することが必要でした。私たちは、チリ、ニカラグア、エルサルバドルに連帯を示しました。その国の政府を鋭く批判することも可能でした。チリでクーデターを起こしたピノチェトに関しては基本的に何でも言うことができました。

しかし、例えばアルゼンチンやブラジルに対しての批判はできませんでした。これらの国に対してはもう少し配慮があり、そんなに厳しいことは言えませんでした。例えば、(イギリスとアルゼンチン間の) フォークランド紛争。私たちは純粋なニュースだけを放送し、解説は控えめました。あれは複雑な問題でした。2国間の紛争で東ドイツはどちらの側につくべきかという問題でした。

人気があったのはDX(遠距離受信)のプログラムです。DXに興味を持っていた人のほとんどは、コロンビアとアルゼンチンにいました。

リスナーは常に、私たちが解放運動を支持し

ていることに共感してくれました。それから、アジェンデ大統領時代のチリについての報道です。アジェンデ時代のチリ向けの報道(ミュンヘンオリンピック、ライブチヒ見本市、世界フェスティバルなど)も、彼らに経済的余裕がなかったため、私たちがチリのために制作しました。30分のチリ向けのプログラムがあり、他国から悪意を持たれないかと心配でしたが、他国のリスナーにはむしろ好評でした。

● RBIが重要視したこと

重要としたのは、国際問題に対する東ドイツの立場であり、東ドイツのポジティブなイメージを示すことでした。さらに、広い意味でのラテンアメリカとの連帯、具体的にはチリ、ウルグアイや、ニカラグアとの連帯です。

フォークランド紛争を深く扱ってはいけないという現実を、私たちはただ受け入れていたのです。これはアルゼンチンのリスナーにとってはあまりよいことではありませんでしたが、それでも外交政策について考えれば、理解を深めることができます。

● 番組に関する内容変更の指示について

私たちの場合は、直接影響を受けない部分が多かったのは運がよかったです。チリ向けの30分間のプログラム、その10分後にあったウルグアイ向けの15分間のプログラムのあとに、自分たちで制作できる時間も45分間ありました。この部分の内容については誰も目を通しませんでした。朝、日報に書いておくだけです。また、ラテンアメリカ向けのプログラムは、きょうは何時から何時までという時間と、タイトルを書いて提出します。もちろん、誰にも怒られないようなタイトルをつけました。

質問：では、タイトルだけで、内容は出さなくてよかった？

はい、そのとおりです。挑発的なタイトルをつけると、上司から聞かれます。リスナーからの質問を受け付けた「今週の質問」というコーナーがありました。東ドイツの教条主義者はこの質問を挑発と受け取るかもしれませんが、リスナー自身はまったく挑発するつもりはなかったのです。リスナーはただ知りたかっただけなのです。

リスナーが立てた質問を放送で読み上げることはできますが、それを日報に載せると上司が怒るんです。でも、タイトルに挑発的なことばを使わず、別の表現にして上司に見せると、上司は「いいね」と言います。そういうタイトルの議論を避けるということです。一般的なタイトルを作れば、それですべてがうまくいくんですね。それは違法ではないですし、くだらない議論を避けることができました。少し違う形で表現するのです。

● リスナーとの関係

リスナーとの関係を保つために行ったのは、番組内でできるだけ多くのリスナーの名前を出すことです。そのために、リスナーからの手紙を扱う『音楽の郵便ポスト』などのプログラムを用意したのです。

さらに、多くの手紙に返事を書きました。コロンビアにも、ウルグアイにも、クーデターが起きるまではリスナーズクラブがありました。

● 外国との交流

私たち編集部員は、かなり出張が多いんです。RBIはキューバのラジオ・ハバナとの間で交流制度があって、毎年、交換人員が3～4週間ベルリンに来て、RBIから1人があちらに行きました。スペイン語ができたからです。そして、東ドイツでは、一度キューバに行った人は、その後、資本主義国への旅行が許されるようになっていました。編集部は常に誰かをキューバに送りたいと思っていたこともあり、編集者全員がキューバに行くことになったわけです。

解説：キューバへ飛行機で行くには、資本主義国であるカナダに途中、立ち寄る必要があった。そのため、選ばれた東ドイツ国民だけがキューバへの旅行や出張が許されていたという。

東ドイツが、ニカラグアに病院を建設することになりました。このときも、同僚の1人が通訳として行きました。また、チリのクーデター後には、ピノチェトの犯罪を調査するための国際調査委員会が発足し、スカンジナビア（デンマーク、スウェーデン、フィンランド）で会議が開催されました。RBIの同僚もそこに行きました。

1973年12月、チリ南部から手紙が届きました。クーデター後の状況について書かれた、リ

スナーからの初めての情報でした。また、チリの強制収容所では、囚人たちもRBIの放送を聴くことができたそうです。

1974年の初めから、スカンジナビアの調査委員会では拷問の被害者が証言していたので、私たちは放送でこれを伝えました。チリの人々に報告することが重要だと考えたからです。チリで何が起きているのかを世界が知っているということを、チリのリスナーに伝えるためです。

● 番組の内容変更の指示について

1回だけありました。内容の変更を求められたのではないですが、放送後、強い批判を受けました。しかし、当時は、この批判はまったく不適切なものだと考えていました。私は、ドイツ女子同盟(BDM)で非常に活躍していた女性にインタビューしました。彼女は、第2次世界大戦の末期、ロシア人がドイツに来る前は、ロシア人に対してどのような否定的な考えを持っていたか、そして戦後、ロシア人に対する見方がどのようによい方向に変わったかを話してくれました。若いころ、彼女はナチスのプロパガンダに完全に影響され、信念からBDMに参加したのです。私と私の同僚は、基本的にその取材を内容がよいものと思って、放送しました。そして、次の日、上司に批判されたんです。

解説：ドイツ女子同盟(BDM, Bund Deutscher Mädel)は、1930年から1945年まで存在した、ナチス・ドイツが、ドイツに住む未成年の少女を統制するために設立した国家組織。

質問：この取材で、上司は何を批判したのか。

その女性が当初、ロシア人をどれほど悪く

思っていたかを私たちが報告したため、彼は、これは反ロシア(ソ連)のプロパガンダだと言ったのです。私はそのインタビューを2人の上司に見せていました。インタビューの内容はドイツ語で書かれていました。1人の上司は承認してくれましたが、もう1人の上司は内容について批判しました。

質問：放送に関する当時の資料は何か残っているか。

RBIの番組はほとんどアーカイブ化されていません。ラテンアメリカ編集部のテープが残っているのは、純粋に運がよかったのでしょう。東ドイツ時代には十分なテープがなかったため、放送のテープ録音が比較的少ないことと関係しています。新しいテープ(何も録音していないテープ)は常に一定量で、これが不足すると、古いテープが使われることになりました。つまり、古い番組は消去され、新しい番組が同じテープに録音されたのです。

チリ向けのプログラムがあったおかげで、幸運なことに、私たちはある時期から専用の部屋と棚をもらえました。そのため、小さなアーカイブを設置することができました。そして、夏にはいつも、東ドイツにいたチリの亡命者の子どもなど、若者を雇い、彼らがそこですべてのものを分類し、整理してくれました。

RBIが終了したら、すべてが捨てられると思いました。なので、ラジオ局の中央資料館の職員と相談し、私たちのアーカイブの一部については引き継いでくれることになりました。こうして、少なくとも私たちのチリ向けのプログラムのテープは保存されたわけです。辞書、原稿など、すべてはゴミとなりました。1990年10月3日、

ラジオ局の広い廊下にこれらすべてが放り出されました。

7.5 ハンネローレ・シュテア氏 (主な担当地域:アフリカ)

● 働くきっかけ

RBIで働き始めたのは1967年10月でした。1962年から67年まで大学でアフリカ研究を学び、大学を卒業したのは1967年7月でした。1960年代初めの植民地主義からの解放後、東ドイツのテレビニュース番組『Aktuelle Kamera』が初めてアフリカ諸国について報告しました。それで、この番組のインターンシップに参加しました。その後、RBIでもインターンシップに参加しました。RBIでは、1964年から65年にかけて、アフリカ向けの放送をすでに始めていたからです。それは興味深かったです。

RBIで働くことに決めたのは、自分の能力を示すことができ、同僚たちがとても親切だったからです。いくつかの例外を除いて、RBIでやっていることも好きでした。毎日、マイクの前に座って短波でアフリカに向けて生放送するのは刺激的でした。

また、私が気に入っていたのは、スワヒリ語のような言語を使うことだけでなく、アフリカ諸国の植民地主義からの解放にも尽力していたことです。当時、すべてのアフリカ諸国が自由を獲得していたわけではありません。南アフリカ、アンゴラ、モザンビークなどの国々はまだ植民地でした。私は、植民地の国々のために何かできないかと思い、アフリカについて研究しました。そして、RBIのプログラムを通じてそれを実現したのです。

私たちはアフリカ諸国を支援する方法につい



ハンネローレ・シュテア氏 (81歳)

てアイデアを出しました。東ドイツで実施したアフリカのための連帯キャンペーンについて報告しました。あれはすばらしかったです。

ネルソン・マンデラ氏の釈放のための闘いも、私の生活に大きな影響を与えました。マンデラ氏が刑務所から出てきたときのことを今でも覚えています。私たちはそれをテレビで見て、ラジオのスタジオに走っていき、そのことを報告しました。それは私の人生におけるハイライトでした。

● 担当業務

私の編集スタッフとしての主な仕事は、東ドイツが何を望んでいるのか、どのような国家なのかをリスナーに伝えることでした。東ドイツは労働者と農民の国家であり、誰もが成長の可能性を持って大学で勉強することができます。リスナーには社会的な成果も伝えました。

もう1つの仕事が、ほかの国と国交を樹立し、国家として承認されることでした。

そしてそれは、アフリカ諸国との関係にも影響を与えました。友好協会が設立され、ドイツ・アフリカ協会やドイツ・フランス協会など

もありました。私たちはこれらの友好協会と直接の関係はありませんでしたが、これらの友好協会からの代表団が東ドイツに滞在しているとき、私たちは招待されて通訳をしたり、ガーナやギニアなどの代表のインタビューをしたりしました。これらの国々は私たちの放送地域の一部でした。

● リスナーに果たした役割

リスナーには、私たちが平和のために活動していること、解放運動を支持していることを伝えなかったのです。例えば、東ドイツの学校の子どもたちが、アフリカ民族会議(ANC)の子どもたちのために鉛筆やノートを集めていたことを今でも覚えています。それはとても重要なことだったと思います。

● RBIの基本方針

RBIは、東ドイツとアフリカ諸国との良好な関係の扉としての役割を担っていました。

実際、これが表向きの理由でした。また、よい放送を通じて、東ドイツに関する情報をアフリカの人々に伝え、東ドイツの外交的認知に貢献することもRBIの目的でした。例えば、外国人代表とのインタビューで、「東ドイツはまだ国家として承認されていません。そのことについてどう思いますか」と尋ねたりもしました。

以上が主なポイントです。それからすでにお話ししたように、自由になるために闘っていた国々との連帯、つまり、当時の東ドイツの国策であった連帯について報告することでした。

確かに、東ドイツの市民からも連帯の声が上がりました。みんなが助けたがっていました。私たちは本当に多くのものを提供しました。のちにわかったことですが、われわれは武器も供

給していたかもしれません。しかし、東ドイツの人々にとって、それは主要なことではありませんでした。

ただ、こうした連帯はこの国の国策の一部であり、もちろん、常に思惑と結びついていました。それはいつの時代も同じです。なぜ今、アメリカがウクライナに参与し、援助しているのか。すべては思惑とつながっています。

ところで、20年以上にわたって、ベトナムが勝利するまで毎日、ベトナムに関するニュースが放送されました。それも東ドイツの連帯の一部でした。

質問：アジアやアフリカの国々にも、社会主義の道を歩むよう説得したかったのか。

もちろん、「社会主義になるべきだ」とは言いませんでしたが、社会主義的な条件のもとで何が可能となるのか、そして時には、それは社会主義的な条件のもとでのみ可能だ、と言いました。例えば、すべての子どもに教育の機会があることなどです。

第2次世界大戦後、西ドイツでも多くのドイツ人が望んだのは、新しい国を建設することでした。すべての人が平等で、発展できる国を作りたかったのです。結局のところ、これは難しいことでしたが、私は今日でも、基本的にこうした考えを支持しています。

プロパガンダということば使いには注意が必要なものの、かつての東ドイツも含め、お金をかけて番組を作っている外国の放送局は、どれも自分たちの国がいかにかすばらしいかを他国に伝えたがっているのです。私たちは、すべてにおいてうまくいっていたわけではありませんが、東ドイツが偉大な社会主義国家であること

を各国に伝えたかったのです。放送でも、社会主義のもとで生活するのはとてもよいことだという、よい意味でのプロパガンダをしたかったのです。

7.6 フリーデマン・シュレンダー氏 (主な担当地域：インド)

● 働くきっかけと担当業務

私は1965年にRBIに入りました。大学でインド学を専攻し、そこで学んだ言語を使いたかったのです。英語の番組を担当していた知り合いから誘われました。RBIがヒンディー語の放送を始める計画があるのだと思いました。

私は2年間、英語番組を担当し、多くのことを学びました。その後、生放送のニュースを読む業務を経て、編集の仕事に入っていました。1967年には、インド向けのヒンディー語放送の技術的な条件が整い、週に2回、20分のテスト番組を始めました。

リスナーから手紙がたくさん届き、放送で名前だけを読みました。リスナーに名前を聞いてもらうことは重要だったので。しかし、それだけでは不十分だったので、私たちはリスナーからの質問に答える形式のプログラムを作りました。その中には東ドイツの日常生活に関することや、政治問題、若者の生活に関する質問が多くありました。結局のところ、私たちの話に耳を傾けてくれていたのはほとんどが若者だったのです。

● インドとの関係

そして、別のシリーズも考えて作りました。『友情の架け橋』というもので、東ドイツとの2国間関係について扱う、週に1回のシリーズでした。インドは政治的に東ドイツと比較的近く、イン



フリーデマン・シュレンダー氏 (81歳)

ドからのゲストを招いてインタビューするというのが中心でした。インドは東西のブロックを行き来できる国の代表格でした。どちらかというとネルー首相によって社会主義ブロックに引き寄せられた感がありました。

そして、それはリスナーからの質問にも反映されていました。例えば、「犯罪が少ないとおっしゃいますが、では、なぜ東ドイツにも刑務所があるのでしょうか」という問いかけです。いわばブーメランとなって、私たちが明らかにしないといけなくなります。結局、そんなことはありませんでしたけれど。

放送では、東ドイツでの生活を紹介するのが主な目的でした。私たちの個人的な関心は、インドと東ドイツの比較的良好な関係をインタビューで紹介することでした。

個人的な見解ですが、インドは非同盟諸国と比較しても非常に左寄りの傾向があり、ソ連と非常に良好な関係にありました。また、特定の分野でほとんどソ連に依存していました。

左寄りというのは、必ずしも共産主義者を意味しません。進歩的な左派は、貧困と闘い、社会変革を求めていました。彼らは「東ドイツも戦後、苦境に立たされ、西側諸国など他国

から支援してもらえなかった」ととらえていました。重要なのは、外交政策における東ドイツへの認識でした。インドが東ドイツを承認した最初の国の1つであるという事実には、貢献できたかもしれません。

もちろん、外交政策の観点からは、国際舞台で生き残るために、国際的な承認を求めることが基本的な条件であり、これは、放送局にとっても重要な目標でした。

● 「ジャーナリスト・コンテスト」

プログラムの大部分はニュースや中央編集部のコメントの翻訳ですが、それ以外については自分たちで設計でき、違いを出せました。それは魅力のある仕事でした。

ほかの言語の編集部がどのように仕事をしているかを知るよい方法がありました。それは、毎月開催されていた「ジャーナリスト・コンテスト」(der journalistische Wettbewerb) でした。

編集部が、自分たちで書いた記事を提出し、コンテストの委員会が審査しました。私もかつてそのメンバーでした。これによって、ほかの編集部の仕事ぶりも知ることができました。例えば、アフリカのスワヒリ語編集部に寄せられた質問だけでは、インド向けの編集に役立つとは限りません。そして、私たちの担当している地域の若いリスナーの関心に合わせたものにしていきました。

コンテストには、多くの編集部が参加していました。参加は自由で、最優秀作品には賞品が用意され、賞金も出ました。

● RBIでの役職

最初はヒンディー語のグループリーダーでした。かなりあとに副編集長を務め、最終的に

は編集長になりました。正確には覚えていないのですが、私がトップになったのは1980年代でした。

● リスナーとの関係

リスナーからの手紙はたくさん届きました。

同僚の女性が革命的な貢献をしました。パソコンでリスナーからの意見をアーカイブ化・システム化した最初の1人です。番組を担当している編集者が、すべての質問と意見にアクセスできるようになりました。1987年の終わりから1988年にかけてのことです。彼女はヒンディー語のグループリーダーでした。おかげでリスナーの手紙をもとにした番組の設計がとても楽になりました。

● 西側の放送について

西側の放送は多くの情報源の1つでした。私は国際志向でもあり、BBCをよく聴いていました。VOAも聴きました。もちろん、テレビのほうが魅力的で、情報源にしていました。ただし、重要な情報も得ましたが、疑問も抱いていました。各国のすべての情報源は、ある程度の政治的影響を受けていると理解していました。たとえ公的サービスだとしても、編集者の内部的なバイアスは常に存在しますから。

もちろん、西ドイツにも個人的な知り合いがいましたし、私の家族もいました。そこでの生活がどのようなものかも知っていました。メディアから公式に発表されることと、自分で経験したこと、ほかの情報源から知り学んだこととの間には、常に食い違いがあります。それは私にもあてはまります。

● プロパガンダのとらえ方

あるメディアで仕事をするということは、編集意図の全体像に何らかの形で組み込まれるということです。そして編集者は、自分がプロパガンダに関与している、という気持ちを抱いてはいないと思います。どの編集者も、自分が働いているメディアの全体的な使命について自分の中で考慮しています。だから私自身は、自分がプロパガンダに関与しているという印象を持っていませんでした。そのような感覚はなかったし、ほかの人たちも同じような状況にあったと考えます。それはプロパガンダではありません。

原則的にプロパガンダというのは、純粋に政治的な用語であり、自分自身として正しくないと思っても、ある目標に向かって追い求めるようなものです。私は、現在のドイツのどのメディアに対しても、そのように非難はしません。

質問：あなたにとってプロパガンダとは？

それは少し誤解を招くかもしれません。ドイツ社会主義統一党の中央委員会をみてください。すべてのメディアを担当していたトップ部門です。それが全体を覆っていました。その部門は「アジテーションとプロパガンダ」と呼ばれていました。政府の目標は、その政策をプロパガンダを通じて、つまり特定のスローガンを繰り返すことによって国民の心に定着させることです。これが政治的なプロパガンダであり、人々に直接、影響力を与えるよう、意図的に使われてきました。

とはいえ、指揮系統の末端にいるのは編集者であり、彼はトップの意思決定者とはまったく関係を持たずに、実行しなければなりません。

感情を抜きにして行うこともあれば、時には良心の呵責にさいなまれながら、またあるときは信念を持って喜びながら、内容に応じて実行することになります。

しかし、東ドイツについては、トップの指導者による組織的な、かつ意識的なプロパガンダを編集者が広めていたとはいえません。私はそれを否定します。間接的には編集者はシステムの一部ではありますが、編集者が直接、責任を負い、自分の良心と折り合いをつけることができ、正しいと思えるものであれば、彼はプロパガンダを行っていたのではないし、関与していません。それが私の信念です。

質問：東ドイツのよい面しかみせないとしたら、それはあなたの考えではプロパガンダにあたるのか、そうでないのか。

よい面……。私にとって、プロパガンダとはゲッベルスが用いた用語です。プロパガンダとは、「私は、絶えず繰り返されるルールで、絶えず繰り返されるフレーズで、人々に影響を与える」というものです。これが、私にとってのプロパガンダです。

ですから、プロパガンダが何かということについて、私は違う考え方をしているのかもしれませんが。

プロパガンダという用語は曖昧です。だからこそ、詳細に定義する必要があります。現在の例では、ドイツ国民の大多数が、核戦争が始まることを恐れて、ウクライナへのこれ以上の武器供与を望んでいません。それは明らかです。国民は外交による平和的解決を望んでいます。ドイツのすべてのメディアは、武器を供与する必要性について激しく報道しています。以

前は平和的な党だった緑の党やCDU（キリスト教民主同盟）も、「私たちは絶対に武器を届けなければならず、紛争は武器を供与することでしか解決できない」という政治声明を出しています。

国民の大多数の意思に反して、メディアがいわば政治家たちの意見を体系的に代弁し続けているとき、これはプロパガンダなのでしょうか？これはどう定義すべきなのでしょう？私はこれをプロパガンダだとは見なしません。これは、大多数の国民の意思に反する政治的表現です。これをどう定義しますか？プロパガンダですか、それともプロパガンダではないのですか？

メディアに対し、決定的な影響を与えうる政治勢力というものは、プロパガンダを通じて目標を追い求めます。唯一の問題は、これがどれだけ継続されるかです。

仮に、ある政党が民意に反する計画を実行しようとしていたとします。記者たちは現場でメモをとらず、報道資料を手に入れて、そこに書かれていることだけを書く。これは、まともなやり方なんでしょうか？私は国民の誰もがその情報をじっくり精査し、自分たちで議論して「これはわれわれにとって問題なのか」と問う流れが必要だと思います。しかし、結局のところ、民主主義だから吟味ができるのです。

プロパガンダとは、政治的な意思形成における概念です。私は、プロパガンダが今現在も実践されていると考えています。問題は、今もそれが重要かどうかです。私たちドイツ人は、メディアに関しては無力です。周りの若者に聞いても誰も何も言わない。ソーシャルメディアで何が広まっているかという、検証済みの情報か、フェイクかのどちらかです。もしくは、公共か民間のテレビではなく、ソーシャルメディア上

で活動する勢力からのプロパガンダかもしれない。原則としてわれわれは無力なのです。

この先、有力新聞を含め、公共放送や公共テレビの将来が心配です。ご承知のように、（存続が）ますます困難になってきています。読者や視聴者はそっぽを向いています。これは大きな問題です。理由として、プロパガンダがそのトップにあります。人々はますます疑い深くなり、メディア消費全体がそうとらえられてしまいかねません。ソーシャルメディアで起こることを誰もコントロールできません。そして、今は人工知能（AI）があるので、何でもできてしまいます。今後、人々がどのように情報を吸収するのかを懸念しています。

これは一般的な問題ですが、ある意味、私にとってメディア消費で問題なのはプロパガンダではなく、微妙な情報操作です。こちらはもっと危険です。

● RBI最後の放送に際して

1990年10月2日の放送については、今もかなり覚えています。私たちはふさぎ込んだ思いでリスナーに別れを告げました。プレゼンターが説明をしました。それはとても感情的なものでしたが、彼はある程度、事実に基づいた形でそれをやり遂げ、私たちは長年のリスナーとのつながりに感謝しました。とりわけ、リスナーズクラブ、長い間聴き続けてくれたリスナーにあいさつしました。そして、「私たちはRBIの終わりを望んでいませんでしたが、統一条約で定められたことです。放送局は1つしか存在できないため、RBIはきょうで放送できなくなります。私たちは知っている限りの放送をしました」。そんなような感じで、明確なメッセージを示そうとしました。

● ドイツェ・ヴェレでの担当業務

1990年に誘われて、実際には1991年からドイツェ・ヴェレで働きました。私は友好的に迎えられました。私はまた、非常に限られた地域での“冷戦”をみてきました。私の担当は、ヒンディー語とベンガル語でしたが、ここは紛争地域であり、実際には冷戦です。リスナーの主なグループはパキスタンにいました。バングラデシュにもリスナーがいました。彼らは非常に異なる政治的見解を持っていました。この2国の関係がうまくいかないのなら、インドを含めた3つの国がうまくやっているとわかっていけるわけがありません。

東西ドイツは一緒になりましたが、インドとパキスタンとバングラデシュは一緒にならないでしょう。

● RBIとドイツェ・ヴェレが果たした役割

RBIは、東ドイツのイメージを外の世界に映し出しました。私たちは、東ドイツの外交政策の立場を外の世界に伝え、とりわけ、若者に伝えようとしていました。

ドイツェ・ヴェレの使命は、西ドイツに関する最も重要な情報を提供することです。それは、外交政策の立場と生活についての情報を提示することでした。原則として、RBIと似たような使命ですが、異なるのは、公式の政策指針がないことでした。これが公共放送局です。特定の立場が一方に偏りすぎないようにします。ドイツェ・ヴェレ時代は、単にドイツを客観的に外国に紹介し、いかなる形でも政治的な偏向は許されませんでした。

質問：冷戦時代と比較して現在の状況をどうみるか。

私は比べられないと思っています。当時は特別な状況でした。2つの大きなブロックが向かい合って、結局、それは冷戦だけでなく、熱い戦争の可能性もあったと思います。その危険性は実際にありました。ですから、当時は“恐怖の均衡”が必要であり、西側だけでなく東側も再軍備が必要だったと思います。結果として、大きな不均衡があった場合よりも、より安全が確保されたのです。

しかし、今はそれがありません。新しい状況なのです。もちろん、ウクライナ侵攻、つまりロシアによる攻撃により、現在、新たな対立が起きているのは確かです。しかし、それは当時の状況とは比較になりません。実際、2つの主要な世界ブロックが対峙^{たいじ}していました。

ゼレンスキー大統領は今、クリミアを奪還するのではなく、政治的解決策を模索する準備ができています。アメリカ人は今、武器を供与することを、ややためらっています。冷戦当時は常に新しい対立があり、何が起こるかは予測不可能でした。この点では、直接比較できないと思います。

8. 現代の“情報戦”をどうみるか

前章では、インタビューを受けていただいた6人から聞いた話をまとめた。紹介できたものは一部にすぎず、そもそもインタビューの時間そのものが限られたものであり、すべてを網羅できたわけではない。そのうえで、6人それぞれで、プロパガンダに対する認識に差があった。それでも、冷戦時代と比べ、現代の“情報戦”のほうがひどすぎると感じている点で一致していた。

今回の調査で全員から確認がとれたのは、RBIの放送の目的が「国際社会において東ド

イツの国際的な承認を促進させること」であった。プロパガンダの定義が曖昧だと主張する人もいたが、彼らの証言が正しいものだと仮定したとして、外交的承認を達成するために、「自らに都合のよい事柄を強調し、都合の悪い事柄を隠す」手法がとられていたのだとすれば、放送を通じてプロパガンダが行われていたことになる。具体的には、都合のよい事柄の例としては、「教育が無償で、能力がある人は大学に進学できること」や、7章の内容には盛り込まなかったが、「工業国として国が豊かであること」などを挙げていた。一方で、政治的な閉塞状況を抱く人がいても、その声は外部には当然ながら発信されていない。

2024年1月現在、ロシアによるウクライナへの侵攻は続いている。シュレンダー氏が指摘していたように、多くのドイツ国民が、武器供与ではなく平和的な解決を望んでいながら、なおかつ冷戦時代とは異なり、表現の自由が保障されているにもかかわらず、ドイツのメディアの多くが、ウクライナへの武器供与の必要性を声高に伝えている現状がある。

一方のロシア側からは、ウクライナのゼレンスキー政権がナチスの残党であるかのような言説を、主にロシアの国内向けを中心に展開し、効果を上げているという現状もある。

イスラエルとパレスチナの衝突によって、一層、人々の記憶から遠のいてしまっているのが、ミャンマー軍によるクーデター後の情報統制である。2023年11月には、軍が放送法を突然変更し、メディアを軍の管理下に置いてしまっている。

イスラエルとパレスチナの衝突も、双方が正義を主張している。本稿執筆時には一時的な停戦は続いているが、状況を打開するための道

筋はみえず、両当事者は双方に都合のよい情報のみを発信し続けている。

9. 終わりに (考察と課題) 放送とネットの差異

旧ソ連でも、イデオロギーに対する不信や不満、葛藤などを抱いている人はいた。そして大勢の人が自由を求めている。もちろん、知識階級にいた人々も例外ではない。ソ連のトップにのぼりつめた、ゴルバチョフ氏自身がそうだったような印象を筆者は持っている。そして、国際事情に通じていた当時の報道関係者も、そうした思いを強く抱いていたのではないかと、という仮説を筆者は立てていた。そして、それは旧ソ連だけでなく東側諸国に共通すると考える。

今回のRBI関係者への聞き取りによって、少なくともフランス担当のボーネ氏やラテンアメリカ担当のハリントン氏からは、そうした思いを抱きながら、日々の業務を遂行していたという強い印象を受けた。そして、聞き取った人々全員に共通していたのが、受け手であるリスナーへの共感や責任感である。

あくまで一般論ではあるが、組織と個人の間においても考え方には当然ながら差違が生じる。同じ組織の幹部間でも、考え方や受け取り方に濃淡がある。組織の幹部と、一般の構成員との間でもそうである。

RBIの基本方針が、プロパガンダを通じて東ドイツの外交的承認を得ることだったにせよ、職員個々人の行動は、本人の考え方に基づいて遂行されていた。上司の指示のうち、従えるところは従うにせよ、そうでないところは、個人の裁量の範囲内で修正や調整が行われていたことが垣間見えた。各編集部でプ

プログラムを制作するにあたって、それぞれが、リスナーに対して誠実に向き合っていたことも、聞き取りから浮かび上がってきた。

今回の調査は、旧東ドイツに限ったものであり、現時点において、ほかの旧東側諸国全体にまで一般化できるものではもちろんない。

冷戦時代のプロパガンダは、当時の最速の伝達手段の1つだった放送を通じて行われた。ただし、短波を中心にした国際放送を受信していたのはごく一部の限られたリスナーだった。

その後、湾岸戦争や米国同時多発テロなどのころまでは、衛星を介したテレビの国際放送やケーブルテレビが国際ニュースの中心的な役割を担った。そのころ、すでにインターネットは存在していたものの、ソーシャルメディアはまださほど力を持たなかった。

だが、いまや世界的にテレビやラジオなど従来のメディアから人々は離れ、むしろソーシャルメディアがニュースの主要舞台となりつつある。誤情報や偽情報もソーシャルメディアを通じて拡大し、問題となっている。

さらに生成AIによる偽情報の拡散も憂慮すべき課題である。2023年11月には、ウクライナ軍の総司令官が兵士たちに対し、直属の指揮官の指示に従わないよう呼びかけているかのように見せかけた偽の動画が、SNSで拡散した。日本でも同月、生成AIを使って岸田総理大臣の声を再現し、民放のニュース番組に似せた偽の動画がSNSで広がるなど、偽情報・偽画像・偽動画の拡散は、技術の進歩によって今後、ますます広がるおそれがある。プロパガンダとは位相が異なるものの、極めて精巧な偽の動画が拡散すれば、国際的な紛争が勃発する危険性すらありえる。

放送が主体だった冷戦時代のプロパガンダ

とは異なり、SNSは国境を瞬時に飛び越え、映像は、言語の壁を難なく突破して世界中の携帯端末に届く。そして今回の聞き取りにおいて、RBIの関係者の皆がソーシャルメディアを通じた誤情報・偽情報への危機感を抱いていた。われわれが手にしている現代のコミュニケーションツールは、東西冷戦のプロパガンダとは比べられないほどの危うさを持っていることを改めて思い知った。

(しおぎき たかとし)

注：

- 1) 税所玲子 (2022)「英BBC創設100年、自らの歩み振り返る」『放送研究と調査』10月号, P61
https://www.nhk.or.jp/bunken/research/focus/f20221201_6.html
- 2) <https://www.bbc.com/historyofthebbc/timelines/1920s>
- 3) <https://www.bbc.co.uk/aboutthebbc/documents/ara-2022-23.pdf>
- 4) <https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/ja/>
- 5) 日本放送協会編 (1963)『世界のラジオとテレビジョン』日本放送出版協会, p.75
- 6) <https://www.voanews.com/a/friday-marks-70th-anniversary-of-voa-broadcasts-to-russia/3728545.html>
- 7) <http://bdxc.org.uk/>
- 8) <http://www.bdxc.org.uk/rbi.pdf>
- 9) <https://www.physics.smu.edu/pseudo/Propaganda/ipatypes.html>